

『旅に出よう—世界にはいろんな生き方があふれてる』

近藤雄生著／岩波書店

タイトルは極めてシンプル、しかも岩波ジュニア新書である。「もう大学生なのに！」と思う人もいるかもしれない。でも、まずは手にとってほしい。そしてひとたび「はじめに」を読んだら、ぐいぐい引き込まれていき、一気に読んでしまうだろう。そして数時間後に読み終えた時には、なぜか充実感に浸っている自分がいることに気づく。それぐらい何かを感じさせてくれる本である。

本書は、大学院卒業後に妻と共に5年あまりに渡って世界各地を回った著者が、その旅で出会った人々の中で特に印象に残った人たちの生き様を著者の五感を通して語ったものである。旅本は、とかく「俺ってすごいだろ」といった自慢漂う武勇伝か、あるいは「内向きの若者たちよ、外に目を向けよ！」と説教めいた話になりがちだが、本書はそのどちらでもない。著者が見た風景、聞いた音や声、嗅覚でとらえたもの、手に触れた物や生き物、口にした食べ物について生き生きと、そしてある意味淡々と伝えてくれている。

本書は9つのエピソード、つまり9人の主人公が登場するが、各ストーリーの背景には宗教、歴史、戦争、文化、家族、環境、国家など私たちを取り巻くありとあらゆる諸問題が横たわっている。著者はそれを客観的に我々読者に伝えつつ、それらのストーリーを自分の中で受け止め、自分自身の考え方、生き方に改めて向き合った上で、その思いを再び私たちに語っている。

私は基本的に、人は何歳になっても何でもできると思っている。でも、「その時」にしておいたほうがいいこともあるのは確かだ。しかし残念なことに「その時」を見極められずに、後になって「ああ、あの時にしておけばよかった」と思うこともある。その一つが、「長旅に出ること」だと思う。とはいえ、実際に長期間の旅をするのは簡単ではない。時間、お金、体力、知力、気力、勇気、周囲の理解などなど様々な条件が整わないとできないことだ。でもこの本を読めば、著者の追体験ができる。本の良さはそこにある。著者の描写を頭に描き著者の言葉を反芻し、「私ならどうするかな」と頭を悩ましたり、「俺はそう思わないな」と反論してみたり、「そっか、そういうことだったのか」と発見にわくわくしたりそんなことを可能にしてくれる。

学生時代に出会っておくとよいもの。「一生付き合える友人（あるいは伴侶）」、「卒業後にもときどき会いたくなる教員」（教員としてはうれしい限り）、そして自分のバイブルとなるような「本」。人間関係が苦手だと思っている人も本が相手なら気軽に付き合えるし、それに本は半永久的にそばにいてくれる。食欲に自分の「バイブル」を探してほしい。

この本を読み終えた誰かが、すぐに休学手続きをして旅に出ってしまったら、私は少し責任を感じつつも、密かに拍手をしてしまうかもしれない。ちなみに、著者は工学部出身である。

執筆 者 紹 介

リー飯塚尚子

教育開発系准教授。専門領域は工学系日本語教育。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『旅に出よう：世界にはいろんな生き方があふれてる』近藤雄生著 岩波書店
(岩波ジュニア新書) 2010年 861円

[ブックガイド目次へ](#)